（続紙　１）

京 都 大 学	博士（ 教育学 ）	氏　名	笹 倉　尚 子
論 文 題 目	フィクションをめぐる語りと心理臨床		

（論文内容の要旨）

本論文は、従来は「心理療法」と呼ばれていた心理臨床学における専門的実践を「心理臨床」として、ひとが自身の生を主体的に生きることをまなざす専門的・実践的関わりであると著者独自の位置づけを行い、心理臨床場面において生じる「フィクションをめぐる語り」という現象に着目し、そうした語りが生まれる心理臨床的意味・意義を明らかにするために一事例を素材として追求し、それにより心理臨床実践に資する理論の一端を構築しようと試みたものである。

論文は、著者独自の概念を定義し次章以降の論述の基盤を明確にした序章に始まり、「フィクションをめぐる語り」という現象が生じたある心理臨床事例の呈示と事例におけるクライエントの語りを「語り方」の視点から考察した第一章「フィクションをめぐる語りとの出会い」、「語り方」をより詳細に検討するために大学生を対象とした質的調査研究を行い、抽出された 4 カテゴリーから成る「語り方」について考察した第二章「フィクションをめぐる語りのプロセス」、第二章と同様の質的調査研究によって「語り手の内面」について分析を加えた第三章「フィクションをめぐる語りのプロセス−他者に語る行為の背景について−」、第二章の調査研究によって見出された知見をさらに深く検討するために、「フィクションをめぐる語り」を言語哲学の領域における文献から仔細に検討した第四章「言語哲学からみたフィクションをめぐる語り」、現代演劇における先行研究を手掛かりとして「語る」という行為をより包括的に捉えようと試みた第五章「フィクションと主体の生成−現代演劇を手がかりに−」、第一章で取り上げた事例を再度取り上げ、「フィクションをめぐる語り」の行為的な側面の特徴を行為主体の再発見的な生成や再構築という視点から考察し、心理臨床における「フィクションをめぐる語り」の意義の総括と得られた知見の心理臨床への還元可能性を模索した第六章「フィクションをめぐる語りと心理臨床」から成り、終章では本論文全体のまとめとして、見出された知見の総括及び現代社会の様相の変化と「フィクションをめぐる語り」との関連が考察されている。

第一章では、心理臨床場面における「フィクションをめぐる語り」に関連する先行研究がレヴユーされるとともに、実際にクライエントによって「フィクションをめぐる語り」が展開されたある事例を取り上げ、この事例の心理臨床家である著者との「関係」の視点から経過が記述され考察されている。考察ではとくに、クライエントの「語り方」と心理臨床家の「聴き方」という観点が導入され、この視点から事例を捉え直すことによって、「フィクションをめぐる語り」の「語り方」が心理臨床家の「聴き方」と影響し合いながら変化すること、クライエントの不確かな「自分」が変容する可能性が論じられている。

続く第二章・第三章では、大学生を対象とした質的調査研究が行われている。第二章では、「フィクションをめぐる語り」の代表的なものである漫画やアニメを他者に語るという現象を取り上げ、その語りのプロセスを明らかにしようとした。分析結果から 4

カテゴリーが抽出され、なかでも「作品について伝えようとする語り」と名づけられたカテゴリーが独自のプロセスであることが見出され、ここから、「フィクションをめぐる語り」という行為を通して語り手が「自分」を再構築する可能性が示されている。

第三章では、「フィクションをめぐる語り」という行為の背景にある語り手の内的体験を抽出・分析している。それによって、語り手が語る他者を慎重に見立てて選んでいること、他者と語り合いたい気持ちを抱いていることが明らかとなり、ここからフィクションをめぐって他者と語り合うことは語り手が安全に「自分」を表現し他者との深い相互交流を可能にする行為となること、語り手と聴き手双方が語り合う行為によってフィクションを手がかりとして「自分」の在りように気づき主体が再発見的に生成される可能性が論じられている。

文献研究である第四章・第五章では、言語哲学と現代演劇がそれぞれ取り上げられ、前者においては第二章における知見である「他者にフィクションを語る」行為を言語哲学領域の文献を検討することによって、この行為の主体に関して「主体の二重化」とも言える現象を考察している。後者においては「語る」という行為をより包括的に捉えるために虚構制作行為の代表とも言える演劇に関する先行研究をレヴユーし、見出された知見から「フィクションをめぐる語り」という行為及びそこで生じる「主体の二重化」という現象が考察されている。

最終の第六章では、これまでの知見をもとに第一章で呈示された事例について検討が加えられている。その結果、心理臨床実践の初期においては説明的・羅列的であったクライエントの「フィクションをめぐる語り」が事例の展開とともに変容し、心理臨床家が想像的な関わりをすることによって自身の内的な体験に開かれる「聴き方」が生成されたことと並行して、クライエントの「フィクションをめぐる語り」がクライエント自身の内的・外的体験を含み込んだ「フィクションについて語る」状態へと変化したことが考察されている。

終章では論文全体を俯瞰したうえで、現代社会における現代人とフィクションとの関わり方の変容について、その現代的特徴が仮説的に呈示され締めくくられている。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、フィクションをめぐる語りという現象をテーマとして、その現象の意味を追求し、その現象がクライエントと心理臨床家との関係及び事例全体に及ぼす影響を、事例研究を基盤として、質的調査研究と文献研究を取り入れて包括的に考察したものである。

心理臨床の実践において、とくにその初期に心理臨床家が直面する困難は、いかにしてクライエントと心理臨床的関係を構築するのかということにある。本論文が高く評価される点のひとつは、そうした心理臨床場面におけるクライエントの語りを取り上げ、語りの「内容」のみならず、その「行為」の側面から、事例を素材に詳細な検討を行ったところにある。心理臨床的関係の構築という根本的かつ本質的なテーマを扱う際には、他ならぬ心理臨床家としての著者の心理臨床観がクリアに反映されることを避けることはできない。したがって、旧来の心理臨床観に準拠しただけでは行える研究ではない。著者が自身の心理臨床観を明確に呈示し、心理臨床の実践における根源的テーマに取り組んだところに本論文の独創性があり、また同時に著者の心理臨床家としての自覚と覚悟を見ることができる。

著者はまず、従来から心理療法と呼ばれてきた実践を「心理臨床」として自身に位置づけ、それをクライエントが自身の生を主体的に生きることをまなざす関わりとして定義づける。そして、その実践における専門性の基盤を深層心理学に置き、「クライエントに内在する個性化の可能性を信頼し、その発現の場を提供すること」が心理臨床家の役割であると、自身の位置を明確にしている。このような心理臨床観の呈示はともすれば独断的になる危険性を孕んでいるが、著者は自身の姿勢が現代という時代に必要な心理臨床家のあり方であることを説得力をもって指摘し、また第二章・第三章の質的調査研究にも見られるように、恣意的な論の進め方ではなく慎重かつ目配りの効いた論述を行っている。本論文が一事例におけるクライエントのフィクションをめぐる語りに基づいた研究であることからすると、本論文は従来の事例研究とは異なる新たな研究スタイルを心理臨床学の領域に提案していると言え、この点でも高く評価することができる。

著者が着目した事例は、クライエントが漫画やアニメつまりフィクションを中心的に語ったものである。心理臨床の場ではこのようにフィクションが語られるという現象はしばしば生じる。山中康裕はすでに、クライエントのこうした「限局した志向性」を「窓」という概念で論じ、「窓」を通して語り合うことの重要性を指摘している。これに対し著者は時代性の視点を導入し、現代では「窓」となっているフィクションの内容ではなくフィクションをめぐって語るという「行為」について検討することが必要であると強調し、この脈絡から事例研究が行われている。事例においてはクライエントの語る行為すなわち「語り方」がある時点から変化したのであるが、著者はそうしたクライエントの変容について当該のクライエントに限って妥当するような早急な言語化をするのではなく、そこから心理臨床実践に資する理論化を目指し、論文全体を通して慎重に論を展開していく。そのなかで著者は、より普遍性のある言語化に向けてさらに検討する必要性を述べている。第二章・第三章に質的調査研究が導入されていることもこうした意識の表れと言うことができる。

このように著者は、事例研究法という従来の心理臨床学の手法を用いてフィクションをめぐる語りの検討を始めるのであるが、そこから事例研究法の限界を暗示的に指摘しようとしている。そうして、呈示された事例を一端背景に退かせ、質的調査研究を前景として、フィクションを他者に語るプロセス、フィクションを語り合うプロセスの検討を行っている。背景に退いた事例は質的調査研究から得られた知見を取り入れて精緻化され、さらに言語哲学と現代演劇のフィルターを通して心理臨床の実践における理解を豊かにしている。よく練られた論文構成であり、著者が言うように「私の心理臨床学」へと向かおうとするプロセスを感じさせる。

口頭試問では論文の構成、フィクションとリアリティ、主体の二重化といった観点から議論がなされた。そのなかで論述の不充分さ、事例における見立ての問題が明らかになった。けれども、そのことは著者の今後の課題を明らかにするものであって、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 25 年 1 月 22 日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。